

# 治療家・野口晴哉から整体指導家・野口晴哉へ

## ある治療家が目指した健康のための思想と実践の様相

小林愛恵(立命館大学)

### 1. はじめに

#### 1-1. 問題関心と本発表の目的

発表者はこれまで、近代日本において病者やその家族がどのような意識・方法を以て病気に対処（西洋医学だけにとどまらない幅広い病気の解決に向けたアプローチ）してきたのか、といった実態解明に向けた調査研究を行ってきた。ここから、近代に生きた人々が、自分や周りの人々の病気、生や死、健康などといった問題をどのようにとらえ、考えてきたのか、実践してきたのか、ということ进行分析することに主眼がある。生きている以上、だれもが必ず、大小かわらず病気にかかり、そして悩まされる。このような自分や周りの人々の病気、生や死、健康などといった問題は、現代を生きる我々にもつながる問題である。しかし、上記に挙げた問題のうち、特にどんな問題に悩まされるのか、どう解決していこうと考えるか、ということについては、当該時期の医療環境やその理念、健康そのものの価値観の在り方といった時代的・個別的な影響をより強く受けるものである。

本発表では、大正から昭和にかけて活躍し、現代でも一定の支持を得ている治療実践のひとつである野口<sup>のぐちせいはい</sup>整体の創始者である野口<sup>のぐちはるちか</sup>晴哉へ着目し、(1)野口晴哉の思想とその治療実践(野口<sup>のぐちほう</sup>法・整体<sup>せいはい</sup>操法)を概観したうえで、(2)その思想と治療実践はある時期を境に転換を遂げるが、この転換の様相を晴哉の理論的な成熟の機と位置付け、野口晴哉自身の治療の現場（病気への対処を行う現場）への参加に際するスタンスの変化と関連させながら意味づける。

#### 1-2. 先行研究

これまでの先行研究において野口晴哉は、大きく分けて2つの研究動向において分析の対象とされてきた。ひとつは、1980年代の「オカルトブーム」に端を発した研究動向であり、主に大正期の霊術・精神療法ブームを発掘し、歴史的に位置付けるものであった。この動向において晴哉は、当該時期に流行した数ある霊術・精神療法のひとつとして上がる程度であり、個別的な内容研究が課題となった。

もうひとつの動向は、前述の動向の課題を引き継いで、晴哉の個別的な内容研究を行っていくものであり、とくに晴哉の中心的な思想である全生思想、そして具体的な治療実践のひとつである活元運動への注目がなされた。しかし、あくまでもこの動向における注目は、体癖論を提唱した昭和29(1954)年以降の治療実践の内容やその理論、社会的な影響の解明が主であると言ってよい。本発表はこの個別的な内容研究の動向の中に位置付けると共に、同動向の分析視点を広げる試みとして、治療の現場という空間を意識しながら、昭和29年以前も含めた晴哉の思想と治療実践全体の活動に注目してみたい。ここから、晴哉が目指した健康像や構築しようとした治療の現場がどんなものであったのか、そしてこれは体癖論を機にどのように変化したのかという思想の転換の様相を明らかにし、意味付けたい。

## 2. 治療家としての野口晴哉の目覚めと思想の確立

### 2-1. 野口整体と野口晴哉とは

野口晴哉は、明治 44（1911）年 9 月、9 人兄弟の次男として東京・上野に生を受けた。2 歳で罹患したジフテリアの影響から満足な発話ができない晴哉は、9 歳まで鍼師の伯父の下で育つ。伯父の下でフランツ・アントン・メスメル<sup>1</sup>の唱えた動物磁気説（アニマル・マグネチズム）への共感を覚えながら、様々な催眠術に関する本を読みふけたという。この経験から自己暗示や催眠術に興味を持った晴哉は、手かざしによる小学校の同級生の歯痛や関東大震災被災時に流行した下痢治療を試みる。ここでの成功体験から、晴哉は若干 12 歳にして治療家としての評判を集めると共に、人間の身体の裡に流れる気の力や念の働きに気付く、治療への活用の術を開拓していくことになる。

### 2-2. 野口晴哉の健康観と「全生」思想

野口晴哉は、活動の初期には既に自己流の健康観や治療観を持っていた。それが人間に備わる裡の力を活かすことを重視した健康観と「全生」思想である。

晴哉がその治療実践を通じて目指したのは「全生」の全うである。これは「生き生き生き、疲れて眠りを求むるが如く死ぬ」<sup>1</sup>ことを目指す思想（全生思想）であり、この達成のための具体的な実践として、愉気・活元運動などの精神療法を主とする野口法を考案し、年齢 15 歳の頃から治療活動を行っていた。全生思想を出発点とした野口法の主眼は、一般的な病氣治し（たとえば、ある病氣の症状やその原因を取り去るといったような）とは異なる。晴哉によれば、人間には生まれた時から備わる身体の裡の力があるのだという。この身体の裡の力を高め、身体の機能や気のバランスを良好に保つことこそが健康であり、この健康観において病氣は除去するものではなく、通過させるものであると考えた。晴哉にとって病氣にかかることそれ自体は問題ではなく、たとえ病氣にかかったとしても、身体が病氣に対して自然に行う自浄作用とも言うべき身体の機能を正常に発揮させ、病氣の経過を邪魔しないように、病氣が通過するまで体を整えて置くことこそが晴哉にとっての治療であり、身体の裡の力が正常に発揮される状態が健康であった。

この健康観において、晴哉が問題としたのは、明治以降制度的な優遇を受けてきた西洋医学や西洋医学に基づく衛生観であった。病氣を通過させるものと考える晴哉にとって、西洋医学のような病氣そのものを身体から取り除こうとしてしまう治療は、身体の裡の力を使う機会を奪い、弱める方法であると批判した。そして身体に注目することなく、みだりに薬や外科、衛生観に頼る人々の健康への姿勢も晴哉の批判対象であった。

小括すれば、徹底的な身体の自然な働きに注目こそが晴哉の特色であり、幼少期に培った知識や成功体験を背景としたカリスマ性を持って、人々への治療活動を行っていたのがこの治療家時代の野口晴哉であったといえる。

## 3. 整体家・野口晴哉への転換—治療を捨て、整体指導家へ

### 3-1. 体癖の発見という転機

前項でも述べた通り、野口晴哉の治療における最重要事項は、自らが看る身体の状態や、その身体

---

<sup>1</sup> 野口晴哉「治療といふこと」（野口晴哉『治療の書』全生社（1977 年）、32 頁）

が持つバランスや特性を見極めるための観察であった。年齢 15 歳の頃から続けた治療活動と身体を観察を通じてある時晴哉が発見したのは、すべての人間が持つ身体運動上の無意識的な「くせ」の存在であった。このくせの現れ方やその傾向を体系づけたのが「<sup>たいへきろん</sup>体癖論」であり、これから身体構造上に発生している歪みを発見し、この歪みの矯正を通じて身体の裡の力を高めていくことが体癖論確立以降の晴哉の主眼となった。この歪み強制のための方法として考案されたのが整体操法であり、この実践では病者自身が身体を動かし、病者自身が自らの身体と対話しながら病者自らの努力によって身体のバランスを整えることが目指された。

### 3-2. 治療のカリスマは治療を捨てることの意味

言い換えればこの転機を経て以降、野口晴哉が長年構築してきた治療の現場に変化が訪れたと言って良いのではないかと考える。これ以降、晴哉は実際に「治療家」という自称を捨て、「整体指導家」という立場を自称するようになる。晴哉はこの転換について端的に「<sup>けんこうせいいかつ</sup>健康生活を保つ為には、<sup>たも</sup>修理より<sup>しゅうり</sup>体づくりの方が早いのです」<sup>2</sup>と述べる。

<sup>わたし</sup> 私にとっては戦前の<sup>せんぜん</sup>落合道場の<sup>おちあいどうじょう</sup>時期が<sup>じ</sup>最<sup>さい</sup>全<sup>ぜん</sup>盛<sup>せい</sup>の時<sup>とき</sup>で、<sup>ちりょう</sup>治療<sup>ぎじゅつしや</sup>技術者としてベストだったのです。  
しかし今は治療をもう一歩進めた体づくりに<sup>い</sup>集<sup>ほう</sup>注<sup>が</sup>しておりますが、この方がやり甲斐があるような気がしております。しかし私がいくら気張っても、仕方のないことで、<sup>ちゅうしん</sup>中心は<sup>どうじょう</sup>道場に<sup>あつ</sup>集<sup>みな</sup>まる<sup>ころ</sup>皆<sup>かた</sup>さんの<sup>こころ</sup>心<sup>じぶん</sup>がけが自分  
で自分の<sup>じぶん</sup>体<sup>からだ</sup>を<sup>かんり</sup>管理し、よりよい<sup>い</sup>コンディショ<sup>ん</sup>ンを保とうとしなければなりません。そう心<sup>こころ</sup>がける方<sup>かた</sup>には、今<sup>いま</sup>ま  
での<sup>けいけん</sup>経験<sup>ちしき</sup>と<sup>ちしき</sup>知識によって<sup>こころ</sup>アドバイスすることはできます。この心<sup>こころ</sup>がけがなく、ただ<sup>あなたまか</sup>貴方任せで、<sup>よ</sup>寄りかかる<sup>せんもん</sup>専門  
では、昔<sup>むかし</sup>の<sup>ちりょうぎじゅつしや</sup>治療技術者に<sup>わたし</sup>私が<sup>また</sup>又なるより<sup>しかた</sup>仕方がありません。  
<sup>な</sup>何故、<sup>たちば</sup>その<sup>す</sup>立場を<sup>からだ</sup>捨てて、<sup>こころ</sup>体づくりを心<sup>こころ</sup>がけるようになったのかということは、そうした<sup>たちば</sup>立場<sup>た</sup>に<sup>た</sup>立たないと、  
<sup>ほんとう</sup>本当の<sup>からだ</sup>体<sup>つか</sup>の<sup>かた</sup>使い方の<sup>しじ</sup>指示<sup>ふせつせい</sup>ができず、<sup>あとしまつ</sup>不<sup>あとしまつ</sup>摂生<sup>あとしまつ</sup>の後仕末ばかりすることになるからであります。これでは<sup>ひゃくねん</sup>百年<sup>かせい</sup>河清  
まつことと<sup>か</sup>変わりはありません。(中略)

<sup>たちば</sup>立場が変わったとは言え、<sup>い</sup>自然健康保持会<sup>しぜんけんこうほ</sup>出<sup>い</sup>発<sup>い</sup>の<sup>こころ</sup>心<sup>か</sup>が変わったのではありません。却<sup>かえ</sup>ってこの<sup>もくてき</sup>目的<sup>たつせい</sup>を達成する  
には<sup>しゅうりせんもん</sup>修理専門<sup>ごて</sup>ではいつも後手<sup>ごて</sup>に<sup>まわ</sup>廻<sup>かんが</sup>ると<sup>からだ</sup>考<sup>こころ</sup>えたから、<sup>こころ</sup>体づくりを心<sup>こころ</sup>がけるようになったのであります。  
遠いように見えても<sup>けんこうせいいかつ</sup>健康生活を保つ為には、<sup>しゅうり</sup>修理より<sup>からだ</sup>体づくりの方が早いのです。急<sup>いそ</sup>がば廻<sup>まわ</sup>れとの<sup>げんげん</sup>諺言<sup>げんげん</sup>があり  
ますが、<sup>まった</sup>全く<sup>とお</sup>その通りであります。<sup>よんじゅうねん</sup>四十年の<sup>ちりょうぎじゅつ</sup>治療技術<sup>たつせい</sup>追<sup>けつ</sup>求<sup>かえ</sup>の結果<sup>ちしき</sup>得<sup>からだ</sup>た<sup>ちしき</sup>知識<sup>からだ</sup>が<sup>からだ</sup>体づくりということでありま  
す。いのちの<sup>しせい</sup>姿勢<sup>ただ</sup>を<sup>しゅうり</sup>正<sup>あか</sup>すということが<sup>か</sup>修理より<sup>か</sup>明<sup>たし</sup>るく<sup>たし</sup>且<sup>たし</sup>確<sup>たし</sup>かなことなのであります。<sup>3</sup>

晴哉によれば、体癖という無意識的な身体運動のくせを矯正する為には、徹底的な第三者の存在が不可欠であり、この第 3 者の立場が整体指導家の役割であるという。この転換は単純な治療の現場へのかかわりの手法の変化だけを示しているのではない。病者がいかに全生思想の全うをできるようにするか、という根本的な晴哉自身の問題意識を追求した結果にたどり着いたのが、晴哉の治療という現場からの離脱であったのである。これは晴哉による長年の実践とその理論の成熟の宣言といっても

<sup>2</sup> 野口晴哉「整体本来の道を」(『野口晴哉著作全集』第 10 巻、全生社 (1990 年)、978-980 頁、初出：社団法人整体協会発行『月刊全生』6 月号(第 4 号)、昭和 39 年 6 月 1 日)。

<sup>3</sup> 同上。

過言ではない。病者の訴えを待ち応える治療家でいては追いつかないのである。そこで病者の訴えに応える治療家を捨てて、病者による整体療法を見守る整体指導家を名乗ることを選択した。この選択は晴哉自身の治療家・整体指導家人生にとっても、またより大きな意味で言えば治療の現場における自ら努力する病者という新たな病者像の創出という意味においても非常に重要な転換であると評価できるのではないか。

#### 4. おわりに一展望

本報告では、野口晴哉とその思想・治療実践から、晴哉自身の治療の現場へのかかわり方の変化について論じた。これまでの先行研究において議論されてきた治療の現場とは、主に医療資源や地域社会における医療の構造的な実態のことを指してきた。この文脈において、治療の現場の主体は治療者であり、病者とその家族は一方的に与えられる関係としてとらえられてきた。しかし、治療者・整体指導家である晴哉は必ずしも一方的でない治療の現場の構築を試みた事例であるといえる。本発表のように、治療の現場の構成要素として俯瞰的に捉えなおす作業は、病者とその家族との関係性について、新たな視点で新たな視点でとらえなおすためのひとつのヒントになるのではないか。

#### 参考文献

西山茂「現代の宗教運動―＜霊＝術＞系新宗教の流行と「2 つの近代化」」（大村英昭・西山茂[編]『現代人の宗教』有斐閣（1988 年））

田邊信太郎『病と社会―ヒーリングの探求』高文堂出版社（1989 年）

前川理子「野口晴哉における「いのち」の思想―近代自己実践からの解放の思想として」（『東京大学宗教学年報』第 13 号、1996 年 3 月、107-121 頁）

田野尻哲郎「野口整体の史的変容―近現代日本伝統医学の倫理生成過程」（『医学哲学 医学倫理』第 27 号、2009 年 10 月、1-12 頁）

田野尻哲郎「活元運動の歴史―野口整体の史的変容」（栗田英彦・塚田穂高・吉永進一[編]『近現代日本の民間精神療法―不可視（オカルト）なエネルギーの諸相』国書刊行会（2019 年））

野口晴哉『野口晴哉著作全集』第 1 巻～第 10 巻、全生社

野口晴哉『治療の書』全生社（1951 年）

野口昭子『回想の野口晴哉―朴歯の下駄』全生社（1980 年）